

歸雁きゝがん

杜と

甫ほ

東來千里の客とうらいせんりのかく
亂定まりて幾年にか歸らんらんさだまりていくねんにかかえらん

腸は断つ江城の雁はらわたはたつじやうのがん
高高正北に飛ぶこうこうまさはきたにとぶ

【作者】杜甫（七一二〜七七〇年）、中国盛唐の詩人。字は子美。号は少陵野老、別号は杜陵野老、または杜陵布衣。「杜少陵」「杜工部」

とも呼ばれる。律詩の表現を大成させた。李白と並ぶ中国文学史上最高の詩人として、李白の「詩仙」に対して、「詩聖」と呼ばれている。また晩唐期の詩人・杜牧の「小杜」に対し「老杜」と呼ばれることもある。

【通釈】私は東から千里も遠くへやってきた旅人である。何年たったら、兵乱が収まって帰れるのだろうか。成都に来ていた雁が、高だかど今しも北へと飛んでゆくのかを見て、はらわたもちぎれんばかりに悲しい。

【備考】帰雁（春に北へ帰る雁）東來（東から来ること。徒歩の郷里鞏県は、成都からみて東である）乱（安祿山と史思明の反乱、いわゆる安史の乱が平定されてからも、チベット軍の断続的な来攻があった）江城（成都のこと。この詩を作ったとき、杜甫は五十三歳で、家族と一緒に成都に澄んでいた）